

おもむか (昭和六〇年度放送文学賞受賞作)

沢瀉の紋章の影に

(第三回)

吉田紗美子

三 朱金の夏

一

次郎彦が、佳蔵や唯一とともに徳山を出たのは文久二年の初夏。脱藩という非合法な手段でなく、参府を了えた主君・元蕃出迎えの一行にえらばれたのである。

大坂天保山まで船旅、そこから伊賀越えて東海道をゆき江戸着、江戸は今井谷にある徳山藩邸に入る。滞在は十日あまり、京へ向かう宗藩主一行六百名の大行列に前後して、徳山侯一行百六十名も江戸を発ち、中仙道まわりで京をめざす。

この旅は通常の、徳山めざしての帰国の旅でなく、これまで幕府が諸大名に禁じていた京洛の地に入り、国事周旋するのが目的と言った政治的意味合いをもっていた。わずか四年の間にそこまで状況が変化してきたのである。

六月三十日には、徳山侯一行は彦根・鳥居本の宿場を睨しらじらあけに出立した。

元蕃の駕籠わきには、栗屋家老、江村彦之進、兼崎昌司ら。次郎彦と佳蔵、唯一ら三人は前衛として、行列の先頭を旅馴れた速足であるいてゆく。次の宿場、武佐^{むさ}までは六里の行程。すぐに陽は昇り、陽は高くなり、今日も残暑の炎天下となった。

琵琶湖の水面が瘴気をゆらめきたてる熱い沼のようにみえかくれ、左には近江富士がただけしい夏の緑に覆われて聳えている。

その山裾をまわって進んで、午前、浪人ふうの者が六人、この行列めざしてまっしぐらに馬を煽ってきた。次郎彦が前方にたちはだかると、

「おうい、その図体の大きいのは兎玉ではないか」

先頭の男がすぐれてよく透る艶のある声を送ってきた。走りよってきたのは久坂玄瑞、つづいて伊藤俊輔、寺島忠三郎ら、顔見知りの五人が砂埃をまきたてて馬をとめた。

次郎彦だけでなく、唯一や佳蔵の顔もそこにみて、「これは、徳山侯の行列だったのか」と、久坂は意外な表情である。

「探しているのは、長井雅楽の行列ではないのか。一昨日、加納の宿では雅楽めは一つ先の合度に居たゆえ、順当にゆけば、われらより先に武佐へ着いていねばならんが」

「鳥居本では、どうだったのだ」と伊藤。

「われらをお避けておるから同じ鳥居本には泊まらぬ。ご挨拶にも罷りです、ごめん、と殿に使いをよこしてきたきりじゃ」あれこれ話しあううち、久坂は顔色をかえ、

「しまった、奴は鳥居本で道筋をかえたにちがいない。舟で琵琶湖の西へ向かったか、伊賀越えで大坂へ出るか、だ。諸君、ここで二手に分かれよう。あの姦物をのめめ京へ入れては我らの恥じゃ、なんとしてもその前に仕留めねば」

おれが死んだら骨を拾え、と、行列の通過をまつ間もどかしげに久坂は汗みずくの馬にとびのり、三騎ずつに分かれて白く灼けた街道を東に駆け去った。

攘夷一開国、時流は刻々に間合いをつめてこの左右にゆれているが、その間に、ふいと浮上してきたのが、長井雅楽の説く「遠略航海説」である。

毛利一門の流れにつらなる権臣、長井雅楽は、まず国内を統一して挙国一致ししかるのち外国に対するというこの策を説い

て、朝廷と幕府ともに信任あつく（老中格待遇であった）、ために長州は急速に天下に勢力を高めはしたが、この策は一方で公武合体論（しかも幕府が主で朝廷が従であるかのような）を招来して、ついに皇妹和宮は慶福あらため家茂に降嫁、攘夷の気運はおもいがけない方向に傾斜しはじめた。

げんに長州の藩是も「開国」である。

雅楽は佐幕の姦物である。

長井斬るべし、京—大坂に続々集まる攘夷派浪士の声に、長州内部でも合唱する者は多い。

雅楽はそれを知って身を退きはしたものの、彼も剛直の傑物であって、「若い者が突の斬のというておるそうじゃが、天下の周旋するに命を捨ててかからぬ者がおろうか」と、なおも京で朝紳間に奔走する気配である。

この二十日間、宗藩主の一行、雅楽の行列と三者ともに後になり先になりして京をめざす次郎彦たちであった。午後、山野を真黒にとざして大夕立。その日、武佐泊まり。

七月一日、大津泊まり。

昼、元蕃は本陣で休息、道中最後の弁当をつかった。この二十日間、連日おなじ献立。小さな入子重の下段に握り飯五つ、上段の菜は椎茸と蒲鉾、こんにゃくなどの煮付けに奈良漬一切れ。

七月二日。いよいよ入洛。

逢坂の関をこえ蹴上けあがりにかかると、はるかに濃い夏藪に沈んでいる京の町がひろがった。

三方にゆるやかな山容をもつ盆地の底に、藁をよせあわせて眠っているようなこの静かな地が京のみやこ、江戸から舞台を移した攘夷—開国の二つの思想が、火花を散らして尖鋭にせめぎあう王城の地、血の匂いと権謀の渦巻くそこへ次郎彦はいよいよ第一歩を印そうとする。四年前から夢見つづけてきた長い旅路の終わりであった。

三条大橋にきて彼は高く手をあげた。行列はとまった。同時入洛の宗藩主の行列がすぎたのち、汗を入れ、衣紋をつくろった一行は隊伍をととのえた。槍持がやがて夏空高く毛槍をあげ、掛け声もるとも鮮やかに振る。覆いをとった挟み箱を立て金

紋をきらめかす。同時に、「下に、下に」、けいひつの声も重々しく、一行は三条大橋をわたる。鴨川の両堤には夏柳の柔らかな枝がたれ、涸れた河床すれすれに燕が腹を返してとびかっていた。

行列は、三条通を西へ、西へと練る。

似たような大路小路に行列見物の人影はまばらであったが、両側の町家の紅殻格子の奥には、身をひそめて行列を見守る無数の視線があった。歓迎の熱い眼差しでもなく、反感の白い眼でもなく、露わな好奇心でも無関心でもない眼、くりかえし新しい覇者を送り迎えしてきた京の人々は、警戒十分に仔細に、今度新しく都を闊歩する長州とはなにもものなのか、なにをもたらずか、を吟味するのであった。

室町通を北上、寺の内までくると、めざす大徳寺の森が彼方にみえ、京特有のそよとも風の動かぬ油照りのなか、すこしの涼と蝉の声を送ってきた。

正午すぎ、元蕃の駕籠は、大徳寺山内、黄梅院の門前についた。元蕃は黄梅院に、一行は大慈院そのほかに分宿する。この国事周旋のための京での滞在はいつまでになるかわからない、とあって、早速、組織が作られる。

次郎彦と佳蔵は「応接方」として、入口近くの控えの間につめる。宗藩、他藩、公儀から禁裏まで、あらゆる顔に面接する「藩の顔」である。

江村彦之進が出てきて上り框に腰をかけると、だまって草鞋の紐をむすび、結びおわるとこの二人には目もくれず、すっと外へ出た。後を追ってきた兼崎昌司が、「これからわれら二人して、所司代へ着到の報告にいつてくるでな」と、彼のだんまりを通訳した。

二人の姿は、山門を出て消えた。

山門のむこうの養源院の土塀が、国許の塀とおなじ鉛色に陽を吸っているのをみながら、つくづくといったように、佳蔵がいった。

「大した変りようじゃないか、なあ」

次郎彦もうなずいた。

あのころからすると、佳蔵も河田家を嗣ぐ身となったが、なんとといっても彦之進ほど変わった者はいない。

安積塾から帰ったのちも、彼は飯田蕃俊教授に忌避されて徳山にいたことができなかった。飯田教授は陽明学者、彦之進は朱子学者だった前教授・福岡青海の愛弟子だった関係からである。そこで彼はやむなく、兄の清とともに九州漫遊の旅に出た。そこから、畿内に旅し、また萩・明倫館に学び、それから芸州の金子僊之助塾に入り、長崎留学。いずれも短期間だったのはそこでの業が嫌らなかつたせいもあるが、なによりも時勢が彼に落ちついて勉強させなかつたのであろう。折しも、北九州の旅先で、主君・元蕃の国事周旋のことを耳にした彼は、一気に江戸に急行して元蕃に拝謁した。

元蕃は彼の忠誠をふかくよろこんで、彼に計った。

「身柄がこのたび入洛して宗家の国事周旋を輔けることは、すでに宗家では幕府の許可をとりつけてある、というのであるが」

徳山には徳山の立場があるが、どうであろう、というのであった。

長い遍歴の間についてか確固とした人材に成長した彦之進は、面長で立派な目鼻立ちの主君の顔をちかぢかと例の凝視でみつめ、たぶん、「行かれるべきであります」と一言、いったであろう。その詳細は次郎彦たちにはわからないが、以来、一にも二にも、彦之進をよべ、彦之進の意見を申してみよ、とお覚えが擡んで、この旅は彦之進の採決で一切が動いている。もはや彦之進は、かつての蓬髪秀才でもなく、兄・安之丞の親友でもなく、次郎彦たちには近寄りたくない趣をそなえた実力者になっていた。

山門から井上唯一が入ってきた。

「大慈院に髪床がきている。明日のお供の者は髪を結っておけ」

唯一は、京留守居役・中村治郎のもとで所帯方、さっき着いたばかりというのに、勝手知ったように山内の寺院を走りまわって用事を擱いていた。

翌三日。

朝五ツ（午前八時）には、次郎彦たち二十二人は元蕃の供をして河原町三条にある長州藩邸に入った。伏見の別邸にいた世子しよご元徳（徳山侯・元蕃の実弟にあたる人である）も到着し、三公揃うと、すぐに会議。

ただえさえ手狭な藩邸は多勢の家臣でごったがえして席もなく、次郎彦は、ええい、と陽のさす縁側にじかにすわった。

三公が長途の旅の疲れを休めるひまなく、こうして早朝から集まったのは、攘夷派の桂小五郎や中村九郎の進言による、藩論を「開国」から「攘夷」に早急に転換させる必要にかられてであった。

長井雅楽を解職したことで他には「長州は公武合体論を捨てた」との印象をあたえたが、実状は、まだ宗藩主はじめ大多数の者が穩健な公武合体論を支持していた。第一、昨日まで「開国」、今日から「攘夷」では、列藩に信義が立たぬ、と考えている。

藩論が統一しない以上、宮中の一角から火の手のあがっている長井雅楽の「遠略航海説」中の、ある用語をとらえた「謗詞似寄り」の非難を釈明することもならず、宮中へは、公疾いと称して参内の時を稼いでいるが、この時の天下の状勢はじつに切迫したものであった。

八月初めには、もともと朝廷に気受けのよい薩摩藩主、島津三郎が千人の供揃いで入洛するはずであり、また土佐も猛烈な朝廷工作をはじめ、仲のよくない長州と薩摩に対する第三勢力として、朝廷は土佐に京都守護を仰せだされる、との噂もある。

「諸侯自儘に入洛し、武人絡繹たり」

といわれるいま、状勢が一夜にして急変する惧れは大いにある。

天下の人心が長州に「破約攘夷」の主導権を望んでいるのに、長州の態度が曖昧だとしたらどうなるか、失望した攘夷派の志士たちは雪崩をうって薩摩の過激派に合流するだろう。こんな小田原評定に費す時はないはずだ、と先のみえる桂小五郎はだまりこくっている。彼はわざわざ美濃の中津川宿まで急行してゆき、三日間ぶっ通しでそんな京の状勢を説いたのだが、宗

藩主は半信半疑だった、そのことが彼を気落ちさせているのだった。

朝廷通の中村九郎は、朝廷のご意向、と力説した。

「朝廷には嘉永以来の攘夷のお心は変わらず、下田条約をみとめ攘夷に期限をあたえたのはひとえに幕府の強請に屈したため、と仰せられる。朝廷がこの長州に破約攘夷をのぞんでおられるのです」

だが、保守派の人々には、攘夷は、思想や観念でなく、まして主導権争いの道具ではなかった。

「沿岸に砲台も完成せぬ今、どう攘夷を実行なされる。仮にゆずって攘夷を強行し、もし外夷に敗れたらなんとされる。わが長藩の存立は度外視するとしても、事は外国相手ゆえ、そのみではすまぬ。もし国体を汚損する結果とならばそれこそ憂慮を悩ますことになろう。朝廷のご意向とて、そこに疑義あるときは、幾度もたしかめ慎重審議すべきである」

だいたい、簾中と外界との伝声管は一部の公卿であるが、かれら宮廷人特有の発想と表現の変幻模糊なることに、これまで幾度翻弄されてきたか。げんに長井雅楽の「遠略航海説」をふかく嘉せられたのはつい先ごろであるが、薩摩の煽動があればたちまち豹変し、「謗詞似寄り」と非難し、今では、長藩が列藩に先んじて勤王の志を表したそのことを嘉したのみ、と仰せられる。おぬしら朝廷通と称する者が、「袞竜の袖」にかくれた公卿たちの操縦に踊らされることのないよう望むものである、と齒に衣着せぬ表現で、がんとしてゆずらない。

「すでに屈辱条約によって国体は汚損されている、今こそ破約攘夷すべきではないか」と叫びだしたい興奮から、次郎彦は全身汗まみれになっていた。庭の土も石も煮えたぎってまともに暑熱を吹きつけてくる。礼儀上、汗を拭うということをしなから、前の者の背中にも着物が貼りついている。三公もさすがに白皙の額にうっすら汗を滲ませているらしく、小姓が見兼ねて風を送ったのか、たちまち「風無用！」と老臣の叱咤がとんだ。

結論の出ないまま、正午に散会。

三公会食ののち、元蕃は大徳寺に帰山することになった。供の者には手軽な昼食がふるまわれる。

広間をさがってきた次郎彦は、玄関わきの小室をみて、久坂……と、言葉を失った。

腕組みしているのは、武佐の街道で別れた久坂で、長井雅楽は京へ入らぬまま大坂から国許へ帰ってしまったが、久坂は刺殺を企てた罪を自首し、お沙汰を待っているのであった。

「君、湊川でなければ」

久坂は次郎彦に澄んだ目をむけた。

誰かが魁となって討死しなければ藩論の統一はならぬ、というのである。

久坂の主張は四年前から一貫している。

いつも自分の一歩先を歩いてゆく男だ、と次郎彦はおもった。

二

二十一日、次郎彦と佳蔵ははじめて天誅にあつた死体を見た。

久しぶりにその日、河原町の藩邸にきた二人は、いきなり冷たい視線を浴びた。攘夷熱にうかされて藩を潰す奴ら、とその視線は非難していた。七日間揉みにもんだ会議は、ついに「攘夷」と一決し、これに不満の反対派はいっせいに国許へひきあげたが、この冷たい目は、土産物などを買うため、まだ京にぐずぐずしている連中であつた。

徳山では帰国する者はいなかった、というより、この旅に加わつた者のほとんどが志を同じくする者だつたからでもある。そのとき、門から走りこんできた一人が叫んだ。裏の高瀬川に死体が浮いている、というのである。

高瀬川は藩邸のまうしろを流れる、貨物運搬のために掘られた人工の浅い川である。二人は、柳の並木のひとところに人だかりしている後から首を突きだしてみた。小さな橋の橋杭に下帯姿の男の裸体がひっかかつて、塵芥とともに揺れている。首は一刀のもとに飛んだとみえ、無傷な体がかえって奇異なかんじを抱かせた。青白くぶよぶよしてみえるのは、川底の青みど

ろが映っているのか、それとも血がすっかり洗い流されたせいか。

「誰やろ」

「さあ、首がのうてはわかれしまへんな」

町人たちがささやきあった。

和宮降嫁に尽力した関係者が「二孿三奸五賊」と一括されて、攘夷派浪士の憎悪の的になっているところから、その一人かと誰かが咄嗟に思ったのであろう、衣類を剥いで川へ捨てた仕業には憎しみがあつた。

人垣が厚くなった。風が出て柳の枝先がゆらいだ。川水も漣だった。そのとたん、男の右手がなにかを掴むようにひょいと動いた、ようにみえた。今にも川底から立ち上りそうな気配に、見物人は、ひゃあ……と悲鳴をあげて後じさつた。突然、次郎彦のそばにいた佳藏がはなれた柳の根元まで駆けてゆくと、首をのぼして嘔いた。

「おまえ、よう、どうもないな」

涙のたまつた眼でいうのに次郎彦も、

「しゃべらすな、咽喉元まできている」

「あの白く見えていたのは背骨だろう。なんと怖ろしい使い手じゃのう」

二人は生唾の湧いてくるのをこらえ、番屋の者が走ってきたのを機にそこを離れた。

藩邸に帰る気も失せ、二人はなんとなく町を歩いていった。低い中二階をならべて町家は道の片側に濃い影をおとしていた。小さな間口の家はどれも奥へ奥へと細長く、なかには室の簾越しに中庭がすけてみえる家もあった。田舎のただっぴろい四角な間取りの家をみなれた次郎彦の目には、この京風のたたずまいは、丹念に穿たれた巢窩がそれぞれに秘密をかもしているようにもみえた。

日蔭で幼な児があそんでいた。托鉢の僧がゆき、丁稚をつれた商家の女房がゆく。どれもこれも優美な山の稜線を背景にそのまま絵のような風景である。だが、この絵のように美しい都は、夜ともなれば密偵が出没し、路次の奥まった家で陰謀が生

まれ、暗い辻で「天誅」の血しぶきがとぶ、血腥ぐさい曇惑的な様相に変わるのであった。

ふしぎな町だ、と佳蔵もおもっていた。ここでは誰もが国許にいるときは別人のようにいきいきする。これまで無上の存在と信じていた藩と殿様が、ひとたび御所を見た眼には、絶対のものではなかったと無意識に悟るのだろうか。九日の御前会議も前代未聞の展開だった……、重役たちの応酬を七日の間だまって拝聴するだけだった下座の者が、突然たちあがったとおもうと、「もう聞き飽きたっ」と叫んだのだった。「国許一回の賛意など、どうでもよい。この国家非常の時にあたり、ここに一座する者が一団となって大義に殉じればよい。もはや議論無用。攘夷あるのみ」、次郎彦も佳蔵も日和見だった者も、その声にいっせいに総立ちとなった、「湊川あるのみ」「湊川でゆくべし」、三公も老臣も嘩然とするなか、熱狂と怒号のうちに藩論は一気に「攘夷」へと急転回してしまったのだった。皆、熱に浮かされていた、それほど気分が昂揚し一致したことはかつてなかった。この都は田舎者をわけもわからず狂わせてしまう、町はただ冷淡に物憂げにひっそり静まっているというのに、と佳蔵は現実的な眼で町並を眺めていた。

次郎彦は、言葉を押しだすようにつぶやいた。

「おれはいやだ、あんな死にざまはしようない」

刑死にさえ形式の美はある。死はもっと端正なもので、白昼、衆人環視のなか裸体が塵芥とともに浮きつ沈みつするような、醜悪で無意味なものであるはずがない。

「殺すだけでいい、川へ捨てて辱めるなど卑しい仕業じゃないか」

次郎彦はいいながら、言えばいいうほど、首なし死体が胸に重く蟠りわたかま、自分でも不可解なほど意識がそこに吸いよせられてゆくのをおかんじた。初めて首なし死体をみた衝撃ともちがう、形容しがたい心理である。

「なぜお前がそんな死にざまをするのだ。敵之丞、もう、ええ加減にせえ」

佳蔵にどなられて次郎彦は我に返った。

あの首なし死体が一生、彼に睨いてくるようないやな予感と告げれば、均衡のとれた性格の佳蔵は一笑に付すだろう、こん

な思いつめを子供のころから佳蔵は指摘して、その欠点をみずから悟って矯めねば有為の人物とはなれぬ、と忠告したものだ。た。

いつか、御所の近くにきていた。

次郎彦は堺町御門のまん前でいきなり袴を捌いて土にすわった。土下座して長州の辺地の一人の草莽の熱い想いを、この門の彼方に在すお方につたえたい、との衝動からであった。佳蔵は苦笑しながらそれに倣った。さすがに呆れ顔に衛士たちは薄ら笑いをうかべてささやきあった。二人の頭に埃をかけて公卿がゆき、威儀を正した侍がゆく。烈日は爽快に首筋を灼いた。長いあいだ土に額をつけているから次郎彦は身を起し、ぬけるような青い夏空を仰いだ。心は奇妙に軽くなっていた。

築地に沿ってゆくと、御所はさすがに広いもので、どこまで行っても深い木立、さかんな蝉の声。しかしここには石垣も城郭も威圧されるようなものはなにもなく、公卿の邸の彼方にほんのちらりと松皮葺の優美な反りが予感されるだけの、じつに無防備で儂ない空間であった。ほんの僅かな手勢で蹂躪できるであろう、だが誰も敢てそれをしなかったのは松林が囲むその空間のあまりな儂さであったのかもしれない。その抽象的で儂い空間に、自分が、長州藩が、天下の諸藩が、その帰趨を捧げようとするのであった。

今出川通にある薩摩藩邸は堂々として、見方によっては、御所を背後から恫喝するようでもある。異国語のような強い訛で声高にしゃべりながら剽悍な侍たちがしきりと出入する。彼らにはあたり憚らぬ憎体にくていなところがあるというのが定評で、「二人揃えば相手を仆すまで競い合う、薩摩に気はゆるせぬ」と彦之進もいう。桂小五郎が島津侯の入洛を気に病むのも、千人の供揃いの力より、その薩摩特有の気風のためである。

二人は不愉快になり、今日は豪遊しようと思っすぐ北野上七軒にむかった。そこは、祇園や三本木のように権式ばらず、すこし泥臭くて生活の匂いも漂っているので田舎出の国侍は寛げるとみえ、上洛中の徳山藩士も溜り場のようにその花街を使っている。二人は身分不相応に立派な「松菱」に入った。長州はんは今や大もてで、二人は愛想よく二階の座敷に通された。

すぐに酒。たこと胡瓜の酢の物がでた。角鉢のなかの、白い、ぶよっとした切り身をみたたん、次郎彦は軽いめまいと

もに齒の間に生唾がわきあがってきた。

「どないおしゃした。顔色が悪うおすえ」

「なんだ、今ごろか。図体の大きい奴は廻りも遅い。吐いて、さっぱりしてこい」

佳藏の笑いをあとに次郎彦は立った。

廁から記憶を辿りながら廊下をひき返し、つきあたりの室の葎戸をひくと、いきなり華やかな色彩が目にとびこんできた。三人も芸者がいる。しまった、室を間違えた、と目を移すと、床柱の前には宗藩の重役・周布政之助で、もう一人は町人ふうの若い男であった。周布は非礼を咎めるでもなく、

「徳山の児玉か。すると、所司代で弁じて『野史』を取りもどした男とは、そちか」

「お耳を汚したようであります」

「なかなか豪気なことをしてのけたのう」

「長州の御威光であります」

ふん、小癩な、とおもったのか、周布は、

「それで、白装束でも罷りてたか」

と笑った。

お出迎えの旅に加わらない藩士生田森衛いぐたの縁辺に、飯田忠彦という人物がいた。この人が水戸光圀の「大日本史記」に感奮し、本紀―後小松天皇まで、列伝―足利義満までにいたるその続篇をかくと思いつたのは十六才のとき、以来、六十三才で歿するまでに「野史」二百九十一巻を著した。

この「野史」のほか、毫埃五十巻、有栖川宮系譜一卷、諡名考十巻、門跡伝二十二巻、諸家系図六十巻、その他その他と、彼の一生は膨大な著述に費されたが、それが幕府の忌むところとなって安政の大獄に坐し、さらに桜田門外の変にふたたび下獄、さすが剛毅な忠彦も圀あきのながきに憤って自殺した。

御所代が押収していたこれらの著書を、次郎彦は生田のたのみを守ってついに取り返したのである。

周布の言葉にむっとして、白装束など芝居がかったことをするか、と次郎彦が横をむくと、周布は芸者に、注いでやれといつて、

「そりゃ、惜しい。偉丈夫のそちが白装束で罷りてたら、所司代の小役人どもは肝を冷したであろうに。徳山の児玉といえ、相州警衛の折にうるそう撤兵を具申した男がおったが」

「あれは、私の義父であります」

「ほう。しかし、うるさいじじいじゃったのう。奴は飯も四角い茶碗で食っていたにちがいない」

周布は若い男を顎でしゃくって、御用達鴻池屋の手代だとおしえ、

「わしが上座に坐つとるが、じつはこの手代どのの機嫌を取りむすんどの最中じゃ。あの手この手を使つても、こやつはなかなか金を貸そうとせぬ。そちも覚えておくとよい、御用達相手の戦さは一筋縄ではゆかぬ」

「滅相な。周布様はお口がわるうて困ります」

若く美しい一人が、「児玉はん、うちも小玉いますのえ。こだま同士で仲良うやりまひよ」と、矢継ぎ早に盃をみたした。人をそらさぬ周布の煽^煽てにのって、攘夷の湊川のと大言壮語するうちに、いつか周布や手代は消えて、座敷を代ってきたらしい佳蔵の真赤な顔が目の前にあった。

周布の奢りなのか、しかしなぜ宗藩の周布ともあろう人物がこんな辺鄙な北野あたりで銀談するのか、あれは本当に鴻池の手代だったか、見られては拙い席へ自分が迷いこんだのではないかなど、疑念もきれぎれに掠めたが、吐いたあとの酒は急速にまわり、次郎彦は前後不覚になった。京へ着いて以来の疲れが一度に発したように手足がだるい。眠りたい、なにもかも忘れてぐっすり眠りたいと、眠りながら彼はそればかりを望んでいた。

熱い膜がへばりついていような暑さに目がさめた。軒の簾のむこうの空は仄赤くうるんでいる。暑い、京の残暑はたえがたい……と、汗のしみた畳から身をずらせて見ると、そこは離室のような場所で、床の間に三味線がたてかけてあった。土瓶

の番茶を飲み干した彼はまた眠りにひきこまれた。夢現に、青い着物の女が蚊遣りに火をつけていた。庭を隔てた棟では女たちの声や皿小鉢の音が聞こえ、「松菱」が夜の商売に目覚めたのを告げていた。もう帰らねばと起き直った次郎彦は、ころんと転がった。まだ足が立たなかった。

そんなものが見えるはずがないと思ひながら彼は、透けた藍色の着物を通して女の重たげな乳房の形や乳首のほの赤さを見ていた。無垢に淡いとき色は、中仙道の峽谷の翠一色のなかにひとときわ可憐に浮きだしていた合歓の花の色だった。崖っぷちからおもいきり手を伸ばしてその花を掴んだ。すると、青みどろの中を白い裸が流れてきて彼を捉えようとする。首のない人間の背中ほどのっぺらぼうで奇怪なものはない。次郎彦がもがいて迫ってくる裸体から解放されると、ふいに甘美なまでかい安らぎが身の廻りにたちこめてきた。御所で仰いだあの抜けるような蒼穹に飛翔する鳥がいた。翼を静しし、ひらひらと峽谷の底めがけて落下をはじめ、途中で羽搏はばたいては一気に中空に舞いあがる。そしてまた翼を張って墜落と飛翔をくりかえす。あの自由な鳥はおれだと、次郎彦は陶醉したように大空に翔ける鳥の動きを追っていた。

「まあまあ、お客はん。こないな所においてやしたの。灯イもつけんと、えらいすんまへん」

騒々しい仲居の声にはっきり目覚めた。簾のむこうの空は今ほ紺青にかわり、空の底には星のきらめきもある。彼は起き、大刀をひきよせた。

「灯はいい。茶をくれ」

「へえ」と仲居は行灯に火をいれ、「ここに置いたりしました。誰ぞ、おもちしたんどっしやるな」

「さっき蚊遣りをつけていた女か」

次郎彦の独りごとに、「誰どっしやる」と湯呑をさしだして仲居は含み笑いをした。そんなんじゃない、と番茶をひと口のんだ次郎彦は、ふと訝しげに自分の右手をみた。髪油の移り香がする。まさかと確かめてみたが、それはやはり、初めて兎玉へ入ったころ、鼻について仕方のなかった化粧の香料にまじる女物の髪油の香りだった。まさか、ともう一度繰りかえしなから、彼は頭の芯が急速に冷えてゆくのを知った。口中も苦かったが、飲み干した番茶はもっと苦く渋く、いつまでも舌に残っ

た。

「ほんまにまたお越しやすな、兎玉はん」

小玉や女たちの無邪気な声に送りだされた次郎彦は、平野神社の境内に入り、床几のようなものに腰をおろした。樹齡三百年の大楠が夜目にも大きな枝を張っているのをみながら、彼はともかく記憶を綴り合わせようとした。夢をみていた……だが、藍色の着物を透かしてみた乳房の記憶や掌にしみついた髪油の香りは、夢の世界のものではない。もしもあの女だとすれば、女の印象は、芸者でも仲居でもなく「松菱」の家族かなにか、どっちにしろ素人女、おれとしたことがなんとゆうことをやってしまったのだ、と彼は愕然とした。力が入ったとたん、腰かけていたものがぐしゃりと潰れ、彼は日中のほてりを残す生温かい大地に倒れこんだ。自分のその体重を思いあわせ、手ごめにしたとすれば……と、彼はさらに愕然とした。もう酔いはさめはて頭の中がしんと鳴るほど冴えていたが、肉体は全身の毛穴からまださかんに酒気を噴きだすのか、闇の底から蠍蚊が群れをなして襲ってきた。

北野から大徳寺まではほんの一足。

彼はひた走って黄梅院にかえった。山門から建物へのびる石畳は途中で左へも折れて竹藪に通じている。その井戸で彼はたて続けに水を浴びた。

入口近い小室では、彦之進がまだ精勤に記録をつけていた。気配に彼はちらと目をあげたが無言である。しばらくののち、なんでいつまでもそんな所に立っているのかといった表情で、滴をたらして突っただけの次郎彦をみた。だが、彼は自分から口を開かない。なんとか言え、なんとか言ったらどうだ、拳を固めぶるぶる震えながら、次郎彦は彦之進を睨んでいたが、ふいとその顔が歪んだ。

三日すぎた。

朝のうちに山門を駆けこんできた者が告げた。

島田左近の首が四条積にさらされている。首はまっくろなまで蠅がたかって目鼻立ちも定かでないが、斬奸の高札によってそれと知れた、とのことである。

島田左近は、井伊大老と通じていた九条閔白の家臣である。閔白が攘夷派の若手公卿九十人の排斥をうけて閔白職を辞任したあと、大老の懐刀といわれた長野主膳の手先となって、安政の大獄の酸鼻に尽力した。志士を売って貯めた財が十万両とも噂され、それだけに浪士の憎しみを察していち早く彦根藩に逃げこんでいたが、京の妾宅にまいもどったところを発見されたのであった。

聞く者はみな、「左近の首に唾の一つも吐いてやれ、松陰先生の恨みじゃ」と、たちあがった。三日前、天誅死体に嘔吐した佳藏までもが、

「ほう、島田左近。どんな面体か」と、興奮して出かけていった。

佳藏が傍からいなくなると、次郎彦はなにがなし解放感を味わった。この三日というもの、古本屋漁りなどしている佳藏の平静さや後めたさのなさが、気詰りでならなかった。

蝉の声はけだるく満山に激み、石畳は白く灼けている。三日前まで、いっばしの志士気取り、夜郎自大の傲りで見ていた風景を、次郎彦はこみあげる苦さとともにながめた。

あの愚行が現実のものとは信じがたいが、あの日の大酔を考えると、それは自らを瞞着したい意識の現れにすぎない。抗弁する自分を押えつけるように、彼は、紛れもなく「手ごめ」(そう考えて彼はその単語の野卑なびききにふるえた、生まれて

この方、彼の周囲にそんな単語は存在しなかった」という、恥ずべき行為を犯したのだ、と自分に言い聞かせた。父栄三郎の怒りよりむしろ苦渋にみちた眼差しがうかんできた。幼いころから、友人も兄弟も、すこしの悪戯や許される程度の悪行をするに反し、彼は日頃身を慎んでいるくせに、なぜか時に度外れた悪行を犯して栄三郎のそんな眼差しを浴びたものだった。だが、今度という今度は愚かさにも事欠いて人にも口外できぬ行為をやってしまった……。

次郎彦はいつか声に出して自責していたらしく、隣の小室で彦之進が乾いた咳払いをした。

足軽が山門を入ってきた。国許への手紙や不用の衣類をまとめている、という。滞在が長びくとみて皆は入用の品を国許に用意させるのである。

「おれは、いい。手紙もない」

ひさのことだから季節の変わり目には衣類も届けてよこすだろう。

この旅がふいに決まり「明朝一番立ちじゃ」と告げたときも、ひさは予期していたように納戸から旅支度一切をとりだしてきた。じつは四年前、声の美しい客の訪れのあったすぐあとから調べてあったのである。どの邸の妻もこれぐらいの用心意はすると知りながら、その時の次郎彦はひさのあまりな「隙のなさ」に息苦しさを覚えた。ひさの縫った手甲の紐はじつにきっちりしていて時に指をしめつけるたび、ずっとその息苦しさを反芻してきた彼であった。

彦之進が出てきて、足軽に五通も分厚い手紙をわたした。ちらとみえた宛名は、兄の本城清のほか意外にも富山源次郎家老、その腹心の本多真人などである。次郎彦が彼をみると、彼も視線を注ぎかえしてきた。徹底癖のある彼はその注視もじつに丹念で、次郎彦はついに目をそらした。同時に自分でも思いがけず皮肉が口にでた。

「江村どのはご精勤でありますのう。上七軒へ遊行するでなし、京見物をするでなし、一日中、机にへばりついておられる」彦之進はさらに蒼味があった暗い眼をすえると、

「なにをいったい、そう逆上さかさせている。嚴之丞、たかが、京にいる、それだけのことでないか」といって、去った。

入口の横手、明り取りのついた吹き抜けの厨では、唯一が帳面片手に、足輕と食事材料その他諸式の買入れを打ち合わせしていた。広い土間をあちこち往来して「どけ、殿之丞。図体の大きいのがそこには邪魔でしかたがない」と、次郎彦をつきとばした。

その仕草は徳山にいたときと同じだった、藩校で安之丞の槍の稽古をうけると、次郎彦をつきとばしてさっさと井戸水を浴び、急ぎ足にかえていったものだった。貧しい彼には畑仕事や肥かつぎ、母親の織った木綿を町へ売りにゆくなど山ほど仕事を抱えているからだ。次郎彦はつきとばされて、やや鬱屈の安らぐのを感じた。

「おぬしはいつも忙しがっている……」

「あたりまえだ。中村どのはいつも留守、したがっておれ一人で雑用を片付けねばならん、忙しいのじゃ」

「そういえば、中村どのはいつもおらんようだな」

「大宮通に女を囲っている。仕入れや藩邸への用事にかこつけて入り浸っている」

「まさか。あの謹直な中村どのが……」

「人は見かけによらん。京暮らしが長いとそうなる。金もごまかしている。女には金がいるのだ」

自分から申しする気は毛頭ないが、月末監査で彦之進が問えばありのままをいうつもりだ、と唯一はいい、続けて、むしろ不可解なように、京の女などどこが良いのだろう、見ろ、この青物屋の後家は田舎者とみて法外な値段をいう、高たか値かいいじゃなないかとなじると、「あんたはんはいちげんさんですよって、当り前どっしやないか」と平然たるものだ、歴史が古い町の間人の発想は理解できぬ、と、帳面を掌で叩いて不快を示した。

妙な成りゆきになってしまった。しばらくして次郎彦はいった。

「唯一、話があるんだが」

「話せ。ええと、兼崎昌司帽子二百とはなんじゃ、ああ、練兵を始めるとゆうとったから、その冠りものことじゃな」

「ちよっと真剣にきいてくれぬか」

「耳は二つもある。さっさと話せ」

薄暗くひんやりした厨を見廻し、次郎彦は口をつぐんだ。

炎天の武佐の街道で久坂らが去ったあと、唯一は目をまぶしげに細めて「殺されるかな」といった。なぜだときくと「あんなに目が据わっていたじゃないか」と指摘した。久坂にいきなり心酔し、久坂がゆくなら黒竜江の奥へもついてゆくといいながら、彼は現実を諷りなくみとり、過大視も美化もしない。唯一の良さと物足りなさはそこにあり、不安や懊惱など無形のおもいを相談してみても答の返ってくるはずはなかった。

夜、京ではじめての詩文会が瑞峯院でひらかれた。題は、「秋日感懷」「雨中萩」「聞虫」。

参会者の話題は島田左近から中村治郎にうつって、今にお咎めだ、という。

「この時勢に、四十面さげて女で骨抜きのだぐだとは、見下げはてた奴じゃ」

佳蔵が容赦なくやつつけた。

「しかも、女は町家の娘らしい」

「素人だから、よけい深味にはまったか」

昨年妻をめぐって人柄が丸くなった昌司も蛇豆煙管をくわえて、「今の京では、素人、玄人の区別はたてにくい。昔から江戸と大坂は女人口がすくない、江戸は参勤交代、大坂は蔵邸の集まっているせいで、ともに一時的に男人口がふくれあがる、それと同じ現象ですな、今の京は」と、売笑もさかんはずだといいたげである。

詩を案じるふりをしている次郎彦は、内心だれの言葉も無心にききのがせないものがあつた。

給料は、一月二十八日として二十八日に出る。小者への払いその他を天引きされ、次郎彦は二両余を受けとつた。国許での息もつまるような儉約とことなり、ここでは体面もあつてじつに気前よく金が動く。いつもはそれがふしぎでならない彼であつたが、今日ばかりは藩の気前のよさがあるがたい。これで座敷に上れる、と金を懐中していきなりたちあがつた。

佳蔵はじろりと彼を見た。大刀をふりかぶって叩きおろすようにいった。

「また、上七軒か」

次郎彦もその刃をはね返す気合でいった。

「そうじゃ。行ってくる」

山門を出るまで佳蔵の刺すような視線が背に貼りついているのを意識し、次郎彦は肩を聳やかしてあるいたが、蒸し暑い曇り空の下をゆくうち「松菱」に行つてなにをしようというのか彼自身にもわからず、なににともしれず惨めで吐立たしかった。彼は盛り塩を蹴散らす勢いで「松菱」に入った。

「ようお出でやしたな、兎玉はん。あれからずっとお待ちしてたんどっせ」

他の座敷から抜けてきた小玉は纏わりつくように次郎彦のそばへ坐り、話をきくと、何度も袂でかく次郎彦を打った。

「いややわ。なんのことかおもたら……そないな女子はん、知りまへん。なんで、そないな人がよろしおすのえ」

「ええ、悪い、じゃない。用事がある」

「あほらし、なんの用事やろ。こうみえてもあてはまだ、人の恋路の提灯もちするほどおちぶれてえしまへんよって」

ふくれてみせた小玉に、なんちゅう他愛もないやりとりであるかと次郎彦は自嘲し、一方で、こんな遊里では時も会話も外の世界とは別種のものだと観念しないわけにゆかなかった。

小玉は「松菱」の女将の縁につながる者らしく、両親は大坂でやはり水商売しているらしかったが、この店では誰にもちやほやされて実の娘のようにふるまっている。酒を運んできた中居に、甘ったれた口調で、

「なあ、七日前のことやて。離室にいたのん誰やったか、思いだしてみてあげてえな」

中居は目を宙にあげ、

「姐はん方でなし、中居はんでなし、素人の女子はんゆうたら、誰どっしやる」

とにかく長州はんで景気のいい今は、下働きの女子衆から蒲団の仕立替えする縫子まで、人の出入はじつにはげしい。顔も着物の色柄もわからぬのでは雲を掴むような話で、そのうち運出番の中居にきいてみよう、といった。面倒臭いのと、次をひっ

ばったのである。

「くれぐれも頼む。では、出直してくる」

次郎彦は唐突にたちあがった。

小玉は瞳をキラキラさせて笑いだした。

「あなたの負けや」

「ほんまどした、あての負けや」

「ゆうたやろ、児玉はんは正直なお人や、て。知ってたら、ゆうたげ」

「そやかて、ほんまに知らしまへん」

「ほな、探したげ。なあ、児玉はん、あっちのお座敷にお仲間の人たち来てはりますよって、いきまひよ、さあ」

小玉は白い小さな手で次郎彦の袴腰を押した。曲り角の座敷まできた次郎彦は、これは……とおどろいてたちどまった。

桂小五郎と朝廷通の中村九郎を上座にすえて、それをもてなしているのは、福岡式部の息子、兼崎昌司、それに、おもいもかけない江村彦之進である。

桂は、藩論転換という京での大役を果したので二、三日後には江戸へ発ち、すでに江戸に到着している世子を援けて、今後は幕閣との交渉にあたる。その彼に徳山藩が送別の宴を張ったのである。

彦之進は場馴れして悠然と芸者を侍らせていた。黄梅院にこもりきりで執務している、と信じこんでいたのは次郎彦のうかつな早のみこみで、次郎彦たち若者が藩邸や祇園遊行やと元蕃の供をしている間、彼はこんなところで宗藩の重役たちと談合していたのか。つまり、おれたち小僧のあずかりしらぬこと、というわけか、と次郎彦は鼻白んだ。

かつて浅見家で胸襟をひらいて談笑していた彦之進は、もういない。考えてみれば、その気配は以前からあった……。

参府の旅は舟旅の方が廉価につく。岩国の新湊から大坂天保山まで七日間、四両だせば蒲団も貸すし船頭は釣りをして料理もひきうける。三人組むと四両は安いのである。その手配の最中ふいと彦之進があらわれ、次郎彦たちは争って彼との乗合を

のぞんだが、彼はさっさと粟屋家老の船にのりこんだ。船中、彼は袋の中味をぶちまけるように九州の情勢について語ったというのであったが、天保山についたころには以前の無口な彦之進にもどっていて、次郎彦たちは九州状勢をなにつ聞かされることはなかった。

そんな彦之進だが、なぜ桂にならべて留守居役の一人、朝廷通である中村九郎を同席させているのだろうか。

いま、京は、散発的な天誅さわぎをべつにすれば、奇妙な平穩を保っている。

藩邸にも格別の動きはない。

あるとすれば……国許に連日のように飛脚がとび、毛利家の記録がひっくりかえされ、そのむかし遠祖―毛利輝元が参内した折の、儀仗、行装の先例が検討されていることぐらいであった。

尊王攘夷の旗を天下にひるがえした長州藩は、それをさらに決定的な形にするため、宗藩主の参内を表現させようとしている。

薩摩の島津三郎はすでに外様大名としては前例のなかった参内をすませているが、そんなことは構わない。「儀式には自ら差等のあるもの」、長藩の参内は薩摩にくらべ、より莊重に、より豪華に、万遺漏のないようにたっぷり時をかけて計画し、幕府の許可などとりつけずに実現することで、幕府や諸侯に対する一大示威運動となるはずであった。

土佐が朝廷に接近しているところから、土佐に後れをとってもならず、その時期はおそくて十月、として中村は動いている。内裏の階のほんの敷段を昇るために、下級の公卿や女官にはじまる無数の階段を黄金で築いている。その一刻も惜しいはずの中村を招いて、彦之進はなにを、よろしく、とつないでいるのだろうか。

そう考えた次郎彦は、先日、彦之進が国許へ送った手紙の宛先をおもいあわせ、一瞬、あたりがぼやけるほど呆然とした。

「なにしておいでやすの。早うゆきまひよ」

小玉が彼の手を握って促した。

参内。

徳山侯を宗藩主に随従させる。

今なら殿は、宗藩が築いた黄金の階を、秋の大殿のうしろから昇ってゆくだけでよい……。

今まで不可解と信じこんで誰もが思いつきもしなかった、歴代の徳山藩主の誰もが浴さなかった、参内という荣誉を彦之進は主君に贈ろうとしているのだった。なんと非凡な着想か。その荣誉の前には、国許の富山家老たちも反対するどころか、彦之進に協力せざるをえないであろう。

呆然としている次郎彦の頭上で、しきりに雷鳴がとどろいていた。空の彼方で垂直な稲妻が立った。次郎彦は胸に縋りついている小玉をゆすぶった。

「小玉、ここは大事な用談中じゃ。二人で別の室で飲むではないか」
そのうち、大粒な雨が粗い密度で落ちはじめた。小玉が顔をあげると、雨気のなかで髪油の香りがただよった。

四

宗藩主と徳山侯の参内は三日後に迫った。根廻しはすべて終わっている。今日にも坊城ぼくじょう伝奏から正式のお達しがあるはずだった。

障子の棧の上段を秋の西陽が染めていた。十月、もう冷えの漂う季節となっているが、この小さな室には午後中の温もりと人いきれが籠っている。小さな床の間の小さな一輪挿しに、都忘れの花があざやかな濃紫の花弁を開いているのを、次郎彦は身を横たえたままながめていた。

「きつと、仕立物をしはるそのさんどっしゃろ」「ごく目立たん人どっせ」と教えられて、ようやく尋ねあてたこの家の正確な場所はまだよくのみこめない。鞍馬口通を横丁に折れ、経師屋や豆腐屋、諸式屋などが並ぶ狭い通りと長い路地につなが

れている奥まったこの家のあたりは、次郎彦にとっては現実のほかの世界であり、地図にない場所であり、むしろ臍ろ気なまま頭に刻んでおきたい特別の場所であった。

二階から見下ろすと板塀を境にあちこちの家の奥庭がよりあって、思いがけないほど近くで人声や三味線の音色や濯ぐ水音などがきこえ、一口にいつて襲われでもしたら逃げ場もない袋小路の奥だとわかる。だが、この危なっかしい家には、外界と隔絶した蕩けるような安らぎがみちていた。あれから、藩邸で謹慎中の久坂が「廻瀾籙議」を上ることもあり、上海視察からかえった高杉晋作の報告することもあり、薩長士十三藩連合の気運も生まれてきてはいるが、一步この家に入ったときから次郎彦にとって、それらはすべて遠い世界の出来事となった。

ようやく尋ねあて戸口に立った次郎彦をみて、そのは言った。

「ほんなら、あてがそばで、ずっと煽いであげてたのもお知りやおへんどしたか」

「……」

「暑い、暑いと、難儀がっておいやした」

「なにも。なに一つ覚えておらぬ。済まぬことをしたのであれば詫びねばならぬと、そればかり思いつめてきた」

「……あれから……ずっと」

八月、閏八月と、そのは首をかしげて次郎彦を擒にしていた長い時を測るような眼付きになると、年上らしくひっそりと淡い微笑をうかべた。

「もう、小娘やおへん」

「では……」

許すというのか、次郎彦の真剣な眼差しの前で、そのは半ば障子の陰に身をかくして、

「男と女の間では、好きか嫌いかしあらしまへん。あんたはんはえろう酔うてはりました、それだけです。なにもお気に病まれることはあらしまへん」

そのの、そんな言葉や、馴染んでから冷たい両手で次郎彦の両頬をはさんで誘うようにみつめる大胆な仕科は、それまで次郎彦を縛っていた侍世界の枷をばらばらに打ち砕くようであった。

お咎めをうけ、黄梅院門前の酒屋の中二階に下げられていた中村治郎は、国許へ送還、とのお沙汰を意外にもふてぶてしい表情できいた、という。情痴に狂った彼には侍世界のことなどもはやどうでもよかったにちがいない。いま次郎彦が「出かけてくる」というたび、佳蔵の目には次郎彦の表情が中村とおなじふてぶてしさを浮かべているようにみえるにちがなかった、それでも構わない、今の彼に悔いることはなにもなかった。

入口の戸が忍びやかにあく気配に、次郎彦は障子を引いてみた。すると真向きに、秋天に響える比叡山の山容があった。山肌を覆うて黄葉と紅葉の盛り、朱金に化した山は夕陽を吸って輝き、盛りあがり、息づいて、まるで精緻な細工物を天の一角に置いたようにみえる。心に沁みる都の自然のうつくしさであった。

帯を締め直して長い路地をあるいてゆくそのの華奢な後ろ姿をむさぼるようにみつめていると、入口の格子戸のあたりで、

「毎度おおきに。お揚げ一枚おまけどす」

「いや、そうどすか。いつもすんまへんなあ、おおきに」

歌うような京訛りのやりとりがきこえ、やがて小笹に豆腐と油揚げをのせたそのが引きかえしてくる。京の町暮らしは豆腐も金をだして買うのかと物珍しく見下ろしている、そのが気付いてはにかなだ微笑をうかべた。湖水の面を小鳥が掠めたほどしずかな、吸いこまれそうな微笑であった。

段梯子の中途から手摺のところに顔をのぞかせたそのは、「起きといやしたか。なんぞお持ちしまひよか」とたずねた。いつものころからか酒も用意されているようである。彼の表情をみたそのは、いつものように盆に干菓子と抹茶をのせてあがってきた。小さな紅葉の形をした菓子次郎彦は一口で食べ、抹茶を一息でのみほす。そのはそんな次郎彦をひっそり坐って眺めている。

「いつも一人なのか」

「近くにお母はんいはって、時たま来はります」

そのは無口で、なぜ一人暮らしなのか、亭主はもたなかったのか、など、次郎彦の知りたいことの半分も進んで話すことはなかった。

「国許では、猫額の土地があれば、そこに野菜を作る」

さっき見た豆腐も買う京の町住みから連想がとんで、次郎彦は藪から棒にそう口に出した。そのは意味を解しかねたのか、
「そうどっしやるなあ」

とだけ、答えた。

そんな時のそのの表情は、入浴の日、紅殻格子の奥の暗がりからじっと行列を見守っていた「京の人々」の顔をおもいださせた。どこか理解しがたい、それ故によけい惹かれてやまない静かな表情であった。

時は容赦なくすぎた。行灯に火が入ると、そのの地味な着物は四隅の闇に溶けて、白い顔と衿足ばかりが浮きあがった。もう帰らねばとおもい、一刻でも長くここに居たいとおもいに苛まれる次郎彦にとって、この夕まぐれの時にみる、人形を置いたほどひそやかなそのほど生々しく見えるものはなかった。彼はそのをみつめる自分の視線をもぎ放すようにした。ここに溺れ、たとえ一夜でも共に過したら、あとはずるずると中村治郎の墮ちた無限の底に彼も舞いおちることとなるであろう。

突然、密度の濃い沈黙を破って、がらりと格子戸があいた。下駄音が長い路地を小走りに近づいてきて、「今晚は、『松菱』からべ、もって参じました」と、小女の甲高い声がきこえた。そのは階下におりていった。

「なんや、もうすぐ、長州はんでご慶事がありますねんて。姐はん方が、ぜひ間に合わせてほし、いうてはりました」

そして小女はやさしい京訛りながらずいぶん露骨に、このまえの仕立物は寸法が間違っていたとか、着心地がわるいとか、芸者たちの苦情をつたえている。それを言葉少なく、へえ、へえ、ときいているそのが哀れにおもえてならなかった。次郎彦は持ち合わせをそっくり懐紙に包んで行灯のそばへ置くと、階段を軋ませて降りていった。

「いやあ、お客はんどしたか」

「……もうお帰りになるとこです。大徳寺への近道、教えてあげとくれやすな」

「へえ、かめしまへんえ」

二人は通りへ出た。提灯をさげた小女が裏道づたいにゆくと、次郎彦も来たことのある津和野藩邸の前に出ていた。

「そちは足が早いな」

「あてら、日に何度とのおう、お使いにいてきい、いわれまっしゃる。ごじゃごじゃしゃべってたら、息が切れて早う歩けしまへん」

小女は口を引き結んでとっと道中足で急ぎ、やがて大宮通で別れていった。児玉ののぶと同じ年頃だろうか、健気に生きているのだとおもいつつ、次郎彦も果てなく続く闇のなかを歩いていった。

黄梅院の山門の外に佇んでいるのは佳蔵であった。次郎彦をみると、いきなりのびあがるようにして、「この馬鹿者が、二度、三度と次郎彦を殴りつけてきた。

「鞍馬口へはゆくなとあれほどゆうたではないか。あそこは密偵の巢じゃ。女にうつつを抜かしていると、今に売られるぞ。この大たわけが……」

「なにをそう怒っているのだ」

「殿のご参内は、おとりやめじゃ」

「なに……」

「大殿と家老の益田弾正へはお許しがでたのに、ここの殿へは今以てなんのお沙汰もない。今か今かと、午後中待っていた皆の気持も知らんと、このバカ者が、」

佳蔵は熱い息をふきかけてもう一つ殴りつけた。よろけた次郎彦は、咄嗟に、理由もわからず、宗藩の奴らに足元を抄すくわられた、と直感した。

入口の板敷では、皆が立ちほだかって「なぜだ」と彦之進をとり囲んでいた。すでに、元蕃の当日の衣服には火熨斗がかけ

られ沓はみがかれ、奉獻する品も從者の準備もすべて調っているというのに、なぜ参内のお許しがこないのか。彦之進は「しずかに」とくりかえして、方丈の向こうの客殿にいる元蕃の耳をおそれていた。その光景をみるなり、次郎彦は無言のまま水を浴び、衣服を改めるが早いか山門を走りでた。

河原町の藩邸に、留守居役の顔はみえなかった。この折衝の任にあったのは前田孫右衛門という者であった。では、と、木屋町ほとりの「待賓場」の階段をふみならして二階にあがった次郎彦は、そこに前田の顔を見出すと、「何故でありましようや」と切り口上になつた。

「わが殿には今以て、正親町三條卿よりも坊城伝奏よりも、参内のお沙汰に接しませぬ」

「わたくしも本夕、突然に坊城大納言邸に召されて、さきほど戻つたところでありますが」

と前田は、そこで十月四日の参内が朝議で許可された旨と、正式には前日に勸修寺侍従より毛利家へ通達されるであらう、と承つた、といつた。

「それは慶賀にたえませぬ。それにつき、わが殿とおなじく予参の願いをさしだされましたる御一門の益田弾正どのには、本夕すでに随従のお許しがありました由、わが殿にいまだお沙汰なきは、お許しかなわぬと解すべきでありますか」

徳山は前田の指示の通り、正親町三條卿に願いを上り、近衛閑白、中山大納言、坊城大納言そのほか、関係者すべてに然るべく鄭重に挨拶して遺漏なかつたはずである。これでは片手落ちではないか、と次郎彦は言外にいつた。

前田は次郎彦の訪問に困惑しきつて、しかし物柔らかに繰りかえした。

「なにぶん、朝議のことは私にも窺いしれませぬ。なれど、今しばらく待たれてはいかが、前日にもお達しがあるやもしれませぬ」

昇殿の作法は微細にわたつて打ち合わせを要するはずであり、前日に通達されて演習できるようなものではない。前日の通達はただの形式、すべてはもう決定されているのであつた。前田の言葉はみえすいた慰撫であつたが、朝議と逃げられては、さらに押す言葉もなかつた。

夜は更けていた。待賓場から藩邸に寄ってみると、ここでは煌々と灯をともして参内準備に余念がない。宗藩主の当日の装束はもとより、二百人をこす供揃いのなかの高張提灯もちにいたるまで、何一つ手落ちのないようにと準備は入念をきわめていた。その間を縫って訊ねてまわるうち、次郎彦にはふいと気付いたことがあった。

益田弾正とは願いを上った相手がちがう……、通常、この願いは正親町三條卿にさしだすとあって彦之進はそこに奉呈したが、弾正はなぜか勧修寺侍従その人に呈した、というのである。疑いもなく、弾正は正親町三條卿に決定権がすくなく、勧修寺侍従のほうが捷徑だと事前に知っていたのであろう……また、彼は宮中への道がいかに平坦でないかも知って二重三重の手当てを施したのであろう。はじめて前後の事情を綜合してそこに気付いた次郎彦であったが、もうこの期となつては、途方もなく大きな力でも働かないかぎり事態は覆えせず、それは小さな徳山藩に望むべくもないことであった。

途方もなく大きな力……次郎彦はそう考えて、そこら中に氾濫する沢瀉の紋章をみた。いまの天下に長州藩より大きい力がどこにあろうか。その宗藩が土壇場に来て、なんらかの政治的理由で徳山を切りすてたのであった。帰ってみた黄梅院は、彦之進のいる小室から暗い投影が洩れるのみで、みじめに寝靜まっていた。

「どうじゃ。なにか、わかったか」

例になく彦之進のほうから口を切った。

次郎彦は憔悴した表情で彼をみた。

「昇殿への道はあたかも迷路、どれが捷徑か田舎侍のわれらには到底見通せるところではありませぬ。抜かりがあったとすれば、公卿への手当てをさらに怠ったこと」

次郎彦は語るうち、身を震わせた。

「しかし、翻弄されたのは公卿にでなく、宗藩に、ではありませんまいか。朝議の結果云々は口実、このたびの宗藩のなされ方は虚心には受けとれませぬ。わが殿は世子君の御兄弟、いかに益田弾正が毛利一門の流れとはいえ、殿とは格が違います。これが世子君なら、われら敢えて口惜しさを忍んでゆずりもしましようが、わが殿が外されてかの弾正が随従するとは。なぜ

です。事にのぞんでかくも見事に切りするとは、支藩はそれほど惨めな存在でありますか、それでは宗支心を一にしてとの日頃の仰せは、すべて食言ではありませぬか」

次郎彦はこれまで沢瀉の紋章の下に宗支一体だと信じてきた、だがこの成りゆきの裏には宗藩の作為が直感され、裏切られたとの想いが否めなかった。

十才年長の彦之進の宗藩観は、次郎彦ほど初心なものではなかった。巨大な宗藩は支藩を庇護もするが、事にのぞんでは容赦なく切りすてて身を守る非情さももつ。いったいなにがあったのか、と彦之進のあたまはすでにそちらの方へ働きはじめ、彼は少年のように啜泣してやまない次郎彦にいった。

「参内など、ゆうてみれば女の簪の如きものじゃ。ではあるが、殿に恥をかかしたはわれらの責めじゃ。意地もある。なんとかせざるなまい」

ご苦労であった、彼は次郎彦の口惜し泣きをぶちきるように話をきりあげると、壁に凭れて仮眠の姿勢をとった。

十月四日。

輿にのった宗藩主は二百二十人余の供揃いに前後を守られ、行装も美々しく河原町藩邸を出て禁裏をめざす。宗藩主の当日の装束は竜胆唐草織紋様の椽色の袍に紫の指貫、紫串留の懸緒の冠纓。したがう者も馬も替馬のそれぞれにいたるまで、豹、虎、熊の皮の障泥と最高の美粧をほどこされ、武人毛利氏の勢威を誇る長い行列は、動く絵巻さながら秋晴れの都大路に続いていった。

勸修寺家で二十五種からなる食事を饗されてのち、中立売門より御所に入る。

昇殿し、天顔を拝す。

この日、奉獻する品は、

主上に 御太刀一腰 御馬代黄金十両

親王に 御太刀一腰 御馬代黄金五枚

敏宮に 白銀百枚 鯛一箱

布衣ほいを着した益田弾正は、「諸太夫の間」まで進むことをゆるされ椽にすわる。これも地下人じげびととしては未曾有の特典であつた。

退朝ののち、勅修寺家に入って諸事周旋を謝し、湯漬けをもてなされたのちふたび乾門より入り、近衛閑白、野宮幸相中將、中山大納言、飛鳥井侍從、正親町三條大納言、坊城大納言の諸邸をめぐって参朝の謝辞をのべる。以上のほか日を改めて、禁裡女官、宮中諸臣にも手厚く贈る。

五日。

藩邸をあげて参朝祝賀の式が催された。

拝賜した「御衝立」「天盃」「黄金十両」、おなじく世子にと賜うた「御卓」「黄金十両」の品々を上段の間に飾って諸臣に拝ませ、足輕の末にいたるまで庭の白洲にならんで賀酒を賜った。江戸と国許の夫人たち、その家臣にもそれぞれ、品物や酒肴を送って賀をわかつ。

その二日間というもの、徳山藩士は耳をふさぐようにして、大徳寺山内から一步もでることはなかった。
十七日。

とくに「徳山侯のため」に賀宴をべつに設け、宗藩諸臣も陪席する、との宗藩の申し出であった。

その朝、威儀を正して客殿を出た元蕃は、駕籠にのろうとしてそこに平服の彦之進を見ると、大きな眼が「そちはゆかぬのか」と、問うた。

「恐れながら、お供仕りませぬ」

理由をいうでもない木で鼻を括ったようなこの答えに、なにっ、と、供揃いの者はいっせいに首を横にして彦之進を睨んだ。誰一人として悦んで今日の賀宴に連なりたい者などいかなかった。弾正の得意面など見とうもないわ、だいたい、この空騒ぎの張本人は貴様ではないか、それを、なんたる勝手な奴か、との非難の眼である。駕籠の戸はしまり、土に顔をすりつけた彦之

進の頭を、皆は袴裾で掃いてつぎつぎに歩きはじめた。

駕籠わきをゆく次郎彦には、彦之進の胸中がわかりすぎるくらいわかっていた。この白々しい慰撫の宴席にあって、ふみつけにされてなお御礼言上せねばならぬ主君の立場をおもつて、彦之進は胸も張り裂けんばかりに自分を苛んでいるであろう。かつて次郎彦が児玉へ入って間なしのころ、彦之進の父の病い重いと書いて見舞ったことがあった。彦之進の看病は女人よりも優しくこまやかで目を腫らされるものがあつたが、さらに驚いたのは辞去する彼に彦之進が「父上はもう……見込みがない」というなり漕然と泣いたことであつた。次郎彦はそれを誰にも秘してきたが、この蒼く暗い眼をした奇氣の人、かつての彼の偶像の内部には、意外にも愕くほど柔らかな感情があるのだつた。

五

正月や盆が一年の区切りとすれば、ひさにとつて一と月の区切りは、半九郎の命日にあたる十九日である。福田寺に墓参する朝、ひさはことに早く起きた。

雨戸を繰ると、まだ夜とおなじ暗さの暁の空に星屑がきらめき、なかにひとときわ大きい明けの明星が輝いていた。細く瘦せた月が一夜ずつこの星に近づき、やがて、この星を月の落した雲のようにみせるかとおもうと、数日のちにはまた離れて、月は遠い彼方の空に去ってしまう。人知れず無言の出会いと別れをくり返す冬空のたたずまいが身近な眺めとなつて、もう幾年になるだろうか。

ひさがお高祖頭巾に顔をつつんで出ると、松蔵が格子門をあけて待っていた。踏み渡しの石の下の溝では、雪解け水が水嵩をまし、夜目にも硬いきらめきをみせてしきりに奔っていた。文久三年、と年が改まったが、徳山では殿様ご不在の年とあつてひっそり恒例の行事をすませ、月末に帰国する殿様ご一行を迎えて本当に正月を祝うのはそれから、一月三日の殿様ご参内

を祝うのもそれから、といった気分の静かな家中のたたずまいである。

福田寺の墓地からは城下が見渡せた。お館の白壁を目印にして視線を辿らせてゆくと、寒気のなかに眠っている侍町や街道の南に密集している町方や、その南にどんよりと灰色に拡がっている海まで一望にみえた。

半九郎の墓に積った落葉を払いながら、父上はこの高みにあって、藩の動きはむろんのこと、児玉の家の出来事、自分の心のゆらぎまで手に取るようにご存知であろう、とひさはおもう。半九郎も時にひそやかに語りかけてくることがあった。

「そうか。もとは寒いとゆうて今朝も来なんだか。あれの気儘にも困ったものじゃ。いつかもわしの実家の河田のおやじどのが不意に立ちよられた折、もとは髪を直し衣服を改めるというてなんと一刻以上も待たせたものじゃから、親爺どのは烈火のごとく怒って帰ってしもうたことがあった。そちの、まだ幼いころのことよ」

深く戒名を彫った、角度によっては生前の謹厳な半九郎の顔をそっくりにみえる墓石は、そう嘆息しながらも、その口吻にはもとをかばうような、ひさに取り做すような微妙な含みがあった。「許してやれ、あれのしたいようにさせてやれ」とひさには聞こえた。

あの気儘な母上に父上はよくも長年辛抱して連れ添われた、と同情していたのは父親びいきのひさの何も弁えぬ娘心からで、決して仲睦まじいといえぬ二人だったが長く暮らすうちにはそれなりの情愛で結ばれていたのだ、と、ひさは夫婦の機微のふしぎさを思わずにはいられなかった。

松蔵は手桶に水を汲んできて墓石を洗う。洗い終わると、簀の崖っぶちから手桶のあまり水をざっと捨てて。しかしその動作も、ここ数年のうちにめっきり鈍くなっていた。

墓参をすませてもどってきたひさは、冬靄のうすれはじめた横本丁の道で、井上唯一の母と出会った。質織りの晒なのか、大荷物を背負った唯一の母は、ひさをみるとわざわざ荷物をおろして、長い丁寧な挨拶をした。蒼い顔をして、せい、せいと喘ぎながら、「あと十日もすれば、帰ってまいります」と、唯一の帰国を待ちわびているようにいった。

「江戸の奥方さまも、二月に入ってお引き揚げになられますとか、この徳山も一度に賑やかになりましょう」

ひさも相槌をうった。

参府制は廢止となり、江戸邸の奥向きも引き揚げときまって、長らく江戸住まいだった正室が徳山にかえる。幾崎夫人は局に退がることになり、いま館では、覺、建具すべてを新しくするために職人が入っている。

唯一の母は、暮らしむきの苦勞をこまかに訴えながら、参府のお供には応分のお手当がつくからそれはありがたいとおもうけれど、やはり伴がいてくれませんと、と、大荷物を目で示して、

「女手といえば私一人なもので、もう、息が切れてなりません。その点、お宅さまでは御帰国が遅れなさっても、なんの不自由もございませんが」

は……と首をかしげたひさをみて、唯一の母はげんな表情をした。次郎彦はまだ京に残るのだろうか、先刻からどことなした話が噛みあわなかったのはその故だったか、そしてそれを知らないのは自分だけ……と気付いたひさの頬はかっと赤く染まった。

「わたくしはお勤めの妨げになってはいけぬとおもいまして、便りもいたしませんので、なにも知りませぬ」

ひさは弁解したつもりだった。だが、ひさには元來、余分の言葉というものがない。自分の思いを他人につたえるのに、言葉を飾ったり優しく包みこんだりする術を知らず、まして微笑を添えるでもなかった。円らな瞳をひたとむけて切口上でいうと、唯一の母は居心地悪く「これは、余計なおしゃべりを……」と詫びて、挨拶も早々にその場を離れていった。

二十九日には、留守居の鳥羽家老はじめ家中一同そろって堅登の広場に殿様の行列を迎えたが、松蔵の話では、そのなかにやはり次郎彦の姿はなかった、とのことであつた。

佳蔵が式台に立ったのは夕刻である。

ひさをみると、国事周旋のための滞在は延びる一方であつたが、このほどようやく長府侯と交替ときまって帰国の運びとなつたと述べ、次郎彦は留守居役を仰せつかったので帰国は春ごろになるだろうとつたえた。

「便りでもくれますとよろしいのに」

「なにかと忙しいのであります。では、他に残る者もおおり、その者が門前へなりと無事の由をつたえてくれと申しております。したゆえ、これにて」

佳藏は、次郎彦に托されたという包みをおくと、落ちつかぬ様子で早々に去ってしまった。

包みを披いてみると、もとは細かい手絞りの手柄、祖母には黄楊の櫛、のぶには千代紙細工の手篋、健に漢籍と筆墨、そしてひさには朱塗の懐中鏡と真ししろな鳥の子紙にくるんだもの、その軽さに好奇心をそそられて折り目をあけてみると、目を奪うほど色とりどりの絹糸の束が冷たく光りながら身を振るようによばれてきた。

「あの武骨な兄さまが、都の風に吹かれて気が利くようになられたものじゃ」、赤い朱房までついた手篋の抽出をあけしめながら、のぶは大はしゃぎだったが、ひさはこんな土産物を買ひ求める次郎彦の姿などどう描きようもなく、驚きから覚めてみると、このあまりに家族それぞれにびったりした土産物に、かえって次郎彦その人の配慮でないようなそぐわなさが感じられてならなかった。

「きっと、どなたかに買物をたのんだのでありましょう」

ひさの言葉に、祖母は急いで、他に頼まずとも帰国前の国待めあてに商人が荷をもって商いにきて、年恰好をきくだけで上手に見立てるのだ、と説明した。

「女の小間物屋でしょうね」

「なして……」

「そんな気がしますもの。あら、やはり、手紙などはどこにも入っておりませぬ」

ひさはそのことの方にこだわっていた。父の半九郎も若いころは屢々参府のお供をしたものだが、土産などただの一度も買つてこなかった。儉しいせいもあるが、それよりなにより、半九郎は鼻下をのばして妻子に土産物など買ひ漁ることに身震いするたちであったからである。だがその代り、手紙だけは入費も厭わず筆まめによこした。几帳面に旅程と日常をしるし、末尾に訓戒めいた文句をつけ加えた簡略なものだったが、その紋切り型の手紙が届くたび、家族は頭をよせあって暗記するほど読

んでは、半九郎の愛を身近に感じたものであった。だのに次郎彦ときたら、檻を出た虎のように飛んでいったきり、この九ヵ月というもの、ただの一度も手紙をよこさない。あの唯一でさえ使ひするのに、「筆まめなあの人には走り書きのひまくらいあるだろうに」と、とひきはこたわり、「私が筆をもつのは苦手とようご存知であらうに」と、口を開けばそんな言葉が出てきうで、家族のよろこびをよそに、膝の上で丸い手鏡を弄んでいるばかりであった。

その夜はどこの邸も赤飯を炊き、酒を酌みかわして家人の無事な帰国を祝った。向かいの福間邸でも唄声がいつまでもやまなかった。参府のお供、お出迎えの旅それぞれに、江戸まで片道二百五十三里、その間に奇禍もあれば病もあり、行く者送る者ともに水盃で別れを惜しむ長途の旅である。ことにこの度は京での滞在が長びいて九ヵ月にわたる長い旅程となり、入洛の前には中仙道で発生していた麻疹に宗支あわせて四百名も集団罹病するという出来事もあり、そのため、遺髪となって帰った者もいる。

御弓町西から数えて三番邸、樗の樹の下の兼崎昌司の邸でも、乳呑子をだいた妻が、江村彦之進の手から昌司の遺髪をうけとった。彦之進の筆になる碑文を刻んだ昌司の墓が、皆の合力によって黄梅院にたった、という。

藩論が「開国」から「攘夷」に転換したことで長州藩内はまっぶたつに割れたが、なかでも長井雅楽の公武合体論の熱烈な賛同者だった、桂小五郎の縁辺にあたる来原良蔵は、この報せに江戸邸から上落してきて真偽をたしかめ、のち、江戸邸にもどって割腹して果てた。これまでの自分の信念が誤りであったとすれば、不忠このうえもないことであったというのである。その死は、長藩の豹変に対する憤死であったかもしれない、また、「攘夷」という悍馬に跨がって遮一無二突っ走る長藩への諫死であったかもしれない。

良蔵が死んだ……、上下一様に衝撃をうけたなかで、ともに高島秋帆に砲術を学び、ともに相州の地で西洋練兵の導入に対する白眼と偏見をのりこえてきた昌司にとって、その死は氣力を奪うほどの打撃であった。上落してきた彼と木屋町の宿で面談したとき、なんとしてでも説得すべきであったと悔まれ、さらに、開明から極端に排外的な攘夷へと雪崩のようにうごく時代の風潮に、彼は半生を賭けた蘭学の将来の危うさをおもい、彼も良蔵の死から半月のち、はげしい残暑のすぎるころ病に倒

れたのである。

浅見家と竹藪をへだてた林芳雲の邸では、重態の麻疹もいえて元気に帰国した息子與と妻との会話がいつまでも続くのをききながら、芳雲の淡い齷色の瞳はさまざまの未来をみていた。

藩是が「攘夷」に転換したことは即ち、佐幕派の失脚を意味する。

あれほども長く権勢をふるった富山源次郎らの政府も時勢の力には勝てずようやく倒れようとする。半九郎逝いてじつに七年も経過して、徳山の藩政改革はようやく成ろうとしている。

しかし、その罪の軽重は……と考えた芳雲はすぐにおもいあたっていた。いま長州藩内部の耳目を集めている長井雅楽の処分、その軽重に左右されることであろう。

長井雅楽の罪案が宗藩主に提出されてからその裁可まで、じつに四ヵ月も要した、(宗藩主は江戸にいる世子の同意を求め、世子も数十日も保留したのである)それほど、この権臣の去就、いや、公武合体論の去就は、長州藩にとっての重大事であった。

長州は「攘夷」と一決したが、宗藩主や老臣たちはまだ心の底では「公武合体論」を正道とし、「尊王攘夷」は一部の軽禄の者の突きあげと異端視している現状なのである。まして雅楽は、毛利一門の流れにつらなる者であった。

その雅楽に宗藩はどんな処分を下すか。

もし寛やかな処分なれば、それは宗藩が公武合体論を放棄せぬということ、したがって徳山の佐幕派の罪もかるくなる、であらう。

もし厳しい処分なれば、それは宗藩が断然「尊王攘夷」を貫く方針ということ、したがって徳山の佐幕派の罪も重くなる、であらう。

すべては雅楽の処分に左右されることであった。

そこまで思いを廻らした芳雲は、やがて嘆かわしげに首をふり、ええっ、と咳払いをした。萩から風の吹くまま、右にゆれ、

また術もなく左へゆれかえず、支藩とはあまりに「つまらん」存在であった。

長井雅楽は二月六日、お沙汰をうけた。「切腹」ときいて、平伏していた彼は、はっ、と上使の顔をみた。「まさか」という表情であった。

(続次集)

あとがき (秋原勝一)

『作文』の主宰者と発行者 今の『作文』

から過去を説明するとき、困難を感じることにいくつもある。その一つは主宰者のことだ。

昭和7(一九三二)年10月に租借地大連で創刊したときは、発行者青木実、編集者安達義信の名義、発行所青木宅で当局の発行許可を得ている。許可なく定期刊行物は発行できない時代のことだ。当時主宰者という名は同人間になく、自然体のままの共和体だった。編集発行の実務は青木実で苦勞は一人で背負った。同人はすべて大連に住んでいた。

昭和11(一九三六)年の暮れのころ、編集者名義人安達義信が新京(長春)に転動になる。新京には、満洲国政府と関東軍司令部があった。南滿洲鉄道株式会社(満鉄)は日本の法人なので日本の租借地大連に本社がある。関東軍は満鉄本社の新京移転を強く望むが満鉄は応じない。その替わり満鉄の重役が

常駐できる事務所を新京に新設した。安達は

そのためその新京事務所に移動になった。そもそも、昭和7年3月に満洲国が建国宣言し

たとき、関東軍がつくった満洲国を日本政府(首相犬養毅)は認めていない。無視してい

る。5月15日(5・15事件)犬養首相暗殺される。後継の内閣が同年九月に対満政策の根本をあらためている。(国民は理解していな

い)。すなわち、軍事に限られている関東軍司令官に対満政策のすべてを委せてしまう。

(軍人は政治に干渉すべからず、の明治の遺訓はいずこに消えたか)。具体的には、

①駐滿全権大使を兼務させた。(満洲の外交を一手に委せた)。

②租借地のうち関東州の行政を委せている

役所、国策会社満鉄の管理も兼ねる役所、
関東局を大使館の傘下にした。

③勅令により軍事に関してのみ命令権を有した満鉄に、鉄道の運営、新線の建設等

についてまでも指示できるようにした。

これら改訂の上で駐滿全権大使が、同月、

日本政府を代表し、満洲国政府と両者による「日滿議定書」の調印に漕ぎつけている。こ

れにより日本政府は初めて満洲国を承認する。この捻り曲げが、日本という国家に悲劇を

もたらすことになるが、これは、大連の小雑誌『作文』にも無理を強いる。

同人の、大連から奥地への異動を招いた。関東軍は、満洲国の国有鉄道の運営、建設ま

ですべてを満鉄に引受けさせた。安達義信は、大連から離れるだけでなく、

新任務に就くため、同人をやめた。編集者の後任は急を要し、私が実名で届けられた。私

が一番年少で職場も満鉄本社経理部なので転動はないし、同人をやめるおそれが全くない

一人に数えられたための方だ。昭和14(一九三九)年夏、私に満洲国の鉄

道を運営する吉林鉄道局経理部に転動命令が来る。それを追うように青木実も大連を離れ

ようになる。青木実は大連図書館司書から

奉天鉄道総局の愛路課への大転身である。彼の場合は会社の命令でなく、誘われてみずから希望したものだ。鉄道総局は、全滿の鉄道を統括する中心体で、愛路課とは、滿洲事変後生じた反滿抗日軍による鉄道襲撃を防ぐために鉄道沿線に自警村を建設維持する仕事で、日常的に現地農民と接触する任務である。青木はこの現地農民と接触する道を選んだのだ。

『作文』は、発行者、編集者とも至急変更をしなければならなくなる。ところが都合のつく適任者がいない。青木実が奉天に移ったことで奉天は編集所となり大連の発行所は、印刷、校正、発送をうけもつ変な態勢になってしまふ。勢いそのままの形で3年がすぎ昭和17年になってしまった。解散論が大連の人間に生じた。これまでも『作文』継続があらゆるくなつたのは何度もあつた。その度に凌いだのは青木実の努力であつたのは歴然とした事実。

この3年間、本人不在の名義人をきびしい大連警察がよく黙認していたと思うが、関東州の行政機関が警察も、関東軍の指揮下に入つたことへの反発がそれを許したのか。

『作文』は第54輯を昭和17年3月に出しているが、第55輯がなかなか出なかつた。結局第54輯は発行者青木実、編集者渡辺淳のままで発行しており、これが日本政府許可の『作文』最終号だ。滿洲時代の第55輯は定期刊行物として滿洲国の許可を得られぬまま、年一回の単行本の制度を利用し、発行者小杉茂樹、編集者青木実、発行所奉天小杉茂樹作文社印刷も奉天で同年12月に発行され、滿洲時代55冊の最終号となつた。したがって『作文』は滿洲国許可の定期刊行物ではない。54輯までが日本政府許可の定期刊行物で、第55輯の一冊だけは滿洲国に届け出た単独の出版物で、日本政府とは無関係である。55輯をみた私たちは、戦局の險しさから、生きて日本に帰れるとは思つていなかった。

昭和39（一九六四）年8月、22年を経た東京でやっと復刊の日を迎えた。出版は自由になり、発行者や編集者の名義人は要らなかつた。青木実を中心に再び相寄り『作文』はよみがえつた。以来今日の206集を数えた。創刊の昭和7年から80年を数え、現在発行・編集人の私も白寿に一を加えたが、ひと言加えたのは『作文』がここまでつないで來れた真の功労者は終生まで（165集）、発行人として生きた青木実を描いて他にない。青木実が夫人の看病に消耗し、自分も心筋梗塞に倒れ、死線をさまようとき、それを支え、身がわりとなつて発行・編集を担つたのは、病身の町原幸二である。私は、青木実亡きあとをつないで來れたにすぎないことをここに銘記しておく。も一つ『作文』は滿洲国政府が許可した定期刊行物とみるのは勘違い。滿洲国政府は許可しなかつた。

滝口夕美の新著と先住の民 『民族衣裳

を着なかつたアイヌ』がこの6月世にでた。

重要な設問「どうして私はここにいるの?」

は、そっくり「大和民族はどこから来たの?」

または「大和政権はどこから来たの?」と結

びつく。近畿地方に根づいた中央政権が、従

わない九州の先住者を討ち、西国に鬼ヶ島征

伐の桃太郎伝説を生み、東海・関東・東北の

先住の民を漸次追いまは討伐し、江戸幕府

時代には、北海道・琉球の先住の民に及ぶ。

明治には台湾・朝鮮・満洲の先住者と相対し、

亡国の因をつくる。大和政権は天から来たと

する天孫降臨説を始めとし、大陸の騎馬民族

渡来説、大和民族は朝鮮半島から蒙古から中

国大陸から東南アジアから南太平洋の島々か

ら来た人びとの複合体であるとも諸説は伝え

るが、大和政権以来の日本の先住民所遇の仕

方は一貫して、武力と血をみる強圧で、先住

者生来の文化を横に、日本文化に従属させる

何らかの同化政策の強要がある。一は姓名を

日本式に変えさせる。或いは、神社を建て日

本の神を尊崇させるなど、先住者の誇と愛に

まで一方的に立ち入る根源的な魂への介入が

ある。満洲の場合は、独立国をつくり、姓名

変更こそないが、国家主権を渡さず、三千万

の先住民に日本の神を押しつける自己遍信は、

世界の信を失い国家を崩壊させる根源であり

真因である。世界はわれらに問うている。

先住民への理なき同化策の、国にあたえる

傷の深さを未だに悟らぬ人たちが、国がかく

して教えない傷手も知らずに、先住民の遺跡

をたのしく観光する姿は、何ともいたましい。

この一冊は得難い書である。

『作文』第206集は 同人の出稿が、渡辺

利喜子と秋原勝二の二人。名古屋哲夫は休み。

故同人吉田紗美子の長編連載は6回に分載す

る予定の第3回。渡辺利喜子の前進座の記録

は、大連にいたときの私ですら、その進歩性

斬新性に惹かれ、注目していたグループの記

録。参考になることが多いと思う。同人外の

寄稿は、今回も坂井信夫の詩。も一つの「バ

ナナ」樋口まち子の小篇は、東京の国立看護

大学の先生。福島県々南の人。3年前の東

日本大震災で、地震、大津波に原奔の放射線

洩れの三大苦に今も悶える福島だが、その県

南に、大震災前には、こんなおだやかなひと

駒があつたのを書いてもらった。苦い情報ば

かりの中、一抹の涼風を頬にうける思い。

『作文』が全国で紹介された 去年の10

月から現在までに拙著『夜の話』と共に、

『作文』が毎日・朝日・読売・日本経済・産

経の各紙、共同通信による地方紙十数紙、テ

レビその他でも紹介された。満洲創刊以来の

小誌未曾有のこと。深く感謝し御礼申し上げる。

『作文』第二〇五集正誤

P 23中段5行 血も凍る。x は 血も凍る。

〃 36上段20行 二八歳 は 二六歳

(作文同人)

名古屋 哲夫

〒六〇三―八二一五
京都市北区紫野下門前町五

渡辺 利喜子

〒一九〇―〇〇〇三
立川市栄町一―二五―九

秋原 勝二

〒二四九―〇〇〇二
逗子市山の根三―十一―三五 渡辺方

次集

第二〇七集 原稿〆切日

平成二五年一〇月末日

(平成二六年一月一日発行予定)

作文第206集 (頒価一、〇〇〇円)

発行日 二〇二三年七月一日

編集 秋原勝二
発行人

発行所 (〒二四九―〇〇〇二)

逗子市山の根三―十一―三五 渡辺方

作文社

電話 〇四六―八七二―五七三二

振替口座

〇〇一九〇―九―六八九二五

印刷所 (〒七〇三―八三三三)

岡山市中区高屋一―六―七

株式会社三門印刷所

電話 〇八六―二七三―〇五五〇代